

自然は捨てべき時に凡てを捨てる、
その態度に微塵の狂ひがない、綺麗だ、
捨てることの出来ない人間は愚かだ……
自分を支へる棒にどこまでもかちりつき、
自ら飛躍を否定して醜態を作る。
芭蕉句あり、

「一つぬいて後ろに置きぬ衣更。」

藤 豆

春の夜をほのかに照らす提燈、
或は助六の腰を飾る蒔繪の印籠、
美人の襟脚をのぞきこむ黄楊の横櫛、
さては秋の眞赤な柿の實に酸漿、
水邊を飛ぶだらりとした首の雁、
實にだらりと下るものの姿は麗はし、

いづれにも頽廢の情調あり、
 われは爛熟せる女性美の蠱惑を感じずも……
 今わが庭の棚を眺めるに、
 瓢箪なりに藤豆だらりと下つて、
 春信の柱繪がきやお仙の細腰を思はしむ、
 藤の葉は高く天を望まんとすれど、
 その實は低くさがりて地中の根を離れざる心こそ、
 實になつかし、實に尊し。

音

墨を磨る音こそ、
 外國になき枯淡閑寂の響なり。
 さては、雨夜をたたへる秋の虫、
 月の屋根を打つ栗の實、
 それにも増して、
 呉服屋の絹をさく音こそ、

わが國獨特の幽韻、

ああ、豊かなり豊かなり。

日本に音楽なしと誰かいふ……

人智の組合せる音楽なきこそ、

實に嬉し。

最善の音楽は、

音楽が自らを樂しむ場合の音楽……

孤獨を破つて孤獨を守る音楽こそ、

尊けれ尊けれ。

われ雪の日に竹の破れるを聞き、

わが魂の叫びかど疑へることあり。

畝火山の鶯

今朝もまた鶯が庭へ来て鳴く、
皆のもの靜かに、靜かに……
ああ、何たる純潔な聲、
無限の明朗が溢れる溢れる、
目に見えない泉から涌き出るやうだ。
鶯は何か私に告げんとしてゐる、

齋らした消息はもつと豊かな世界のことかも知れない、
だがそれは何處のことか、
神秘的な音律をころがして、
鶯は自分獨りて神を認めてゐるのかも知れない。
人間は足を傷め、苦痛に呻吟してゐる、
鶯は神にかはつて勇氣つけて呉れるのだらうか、
それとも、もつと恐ろしい將來を警告してゐるのだらうか。
私は氣を落ちつけ、ぢつと鶯の聲を聞いてゐる、
眼前がはつと明るくなるやうに感ずる、

昔の世界が詩の扉を開けるやうに感ずる、
失つた人間に崇高がもどつて来るやうに感ずる、
魂の混亂が淨化されるやうに感ずる。
私の眼に一幅の光景がくり廣げられる……
樞原の宮は壯麗だ、
槍や鋒が立ちならんで守護してゐる、
畝火の山は今春のまつ盛りで、
鶯の聲が亂れるやうに鳴いてゐる、
警固の武士は鶯に聞きほれてゐる。
ああ、それは二千六百年も昔のことだが、

その時の鶯一羽が今私の庭へ来て鳴いてゐるのだ……
純な詩的な神秘的な聲で鳴いてゐるのだ、
私は昔樞原の宮を稱へた聲に耳をそばたててゐるのだ、
建國の始め國の將來を稱へた聲を聞いてゐるのだ。

物的爭奪に心が顛倒して仕舞つた、
世界は血の池地獄を描いてゐる、
昔豫言者だつた爲政者は大衆の奴僕となつて仕舞つた、
創造者だつた彼等は摸倣者となつて仕舞つた、
なるほど、彼等の意志に根強いものがあるか知れない、

外的通俗性に若干の價值もあるだらう、

だが私はもつと偉大なものを期待して來た、

恐らく彼等の耳に、鶯の聲が通じないであらう。

庭の鶯は鳴き止んで仕舞つた、

どこかへ行つて仕舞つた、

ああ、二度と私の庭へ來ないかも知れない、

鶯は警告が無駄だと思つたかも知れない、

痺れたものに神秘の音信は分らないと思つたかも知れない。

ああ、誰が今朝私と等しくこの聲に、

崇高な暗示を聞いたであらうか、

だが心のなかにそれを秘めねばならないもの、私獨りであらうか。

註、本詩は昭和十六年春の一感想、もとより大東亞戰爭前の作。

女菩薩

雪はしとしと降る。

私は行通絶えた町の書齋に坐り、

両手にしかと時を握つて、

寂滅無爲の瞬間を作る……

荒涼いやが上に集り、

眞赤な炭火は蛇の舌の如く、

書齋内の暗さを嘗む。

床の間に置いた白百合は、

凡てを捨て給ふた女菩薩だ。

時に遠くより豆腐屋の喇叭響き渡る、

「ああ、人間の世界と交渉はまた絶えない。」

海

血に塗られる、生臭い、
嵐に苛まれる、凄絶また凄絶、
陸はまるで屠殺場だ、
神はこれを豫期し給ひしや、
神心あらば、陸を海に返し給ふの時だ。
死骸山を築く、

花咲く春を培ふ役に立たない、
飛行機空を走る、
鳥に進路を教へるのでない、
ああ、世は刈菰と亂れる、暗い、
人間はまさに血迷ふ羊だ、
我等に責任あれど、是正の路を知らない、
聲小さくて、眞理を語るに無力だ、
ああ、天地創世の神様こそ誤り給ふた、
陸に渾沌へ返れと叫び給ふの時だ。

天を浸す一碧の海、青い海、青い海、青い海、
 巨水漫漫たる廣い海、廣い海、廣い海、
 海し叫ぶ言葉に、

「神よ、陸を無いものになし給へ、
 以て悔悟の實をあげ給へ、
 我等に陸を與へ給へ、

一飲にのみほさしめ給へ、

神自然の大音楽を信じ給はば、
 耳を海と空との合奏に傾け給へ。
 人間山を祝讚し、

川は四季を映して流れる、

だが地圖に若干の起伏を添へるに止まる、
 平和われ等の波濤にのみ溢れ、

永劫の道、われ等の波間にのみ輝く、
 波さか卷く、海は流血の惨を知らない、
 嵐あれる、海はこの爪牙を受けない。

冰山北海に浮んで、

眞理の守護門を築く、

南方に鯨遊んで、

熱帯の海を稱へる。

海と空だにあらば、
永劫の歌盡きる時なし、
宇宙ここに全し。』

鱒、海豚、鮫あるは蜻蛉返りの鯨、

海に和して叫ぶ言葉に、

『陸は亡びる、亡ぼし給へ、

人間をして墓場へ急がし給へ、

最後の審判來つて、我等勝てりと宣じ給へ。

我等海に浮ぶも、また沈むも、

我等海を飲むも、また飲まざるも、
青い海こそ、青い海こそわれ等の所有だ、
廣い海こそ、廣い海こそわれ等の世界だ。』

註、本詩は昭和十五年冬から翌年春にかけ英獨死の戦を心に思つて作れるもの。

青いお椀

私は見たり、完全な空の形、
青いお椀、大地をふせたり、
大地に一本の木なく、草なく、
ただ赤い土、大海の如くに、
空の音律に答へたるのみ。
今日本に歸りて、私を見る、

山嶽高く空に迫りて、その髯をつき、
樹木背のびして、その乳房をいぢる。
ああ汝、何故に空の形を損はんとするや、
われ故國の自然を禮讚し來れど、
今汝の無禮を罵る。
山よ、ひれ伏して平面の土にかへれ、
樹木よ、自らを無にして薪になれ。
私は願ふ、再び印度にかへり、
ハイドラバットの海の岡、
赤き砂塵に身を埋め、

全き形の空をかぶつて、
その朗朗たる音律に和し、
赤き砂塵の一粒たらんことを。

壁

確に私の詩は終つた、
疲れてゐるのでない……
私の書いた詩が何だつたかを辿ることが出来ない。
私は床の間を眺めて坐つてゐる、
床の間には錆色の壁だけで何物もない、
開いた部屋の障子から庭の樹木が見える、その間から青空が見える、

私はもう幾時間坐つて、壁を見詰めたかを知らない。
恐らくこの部屋は人生の避難場であらう、
だが私は神の譴責を忘れるのでない、
私は思ひきり罪を犯すことが出来なかつた、
血と後悔で自らの価値を高めることが出来なかつた。
私は今から床の間を見詰めてゐると、
壁が、この壁が、私の心の壁であるのを知つた。
私が経験した過去の場面が、壁の上に顯はれて来る……
太陽が山を登り海に没するのを見た、
野原に亂れる花の上に眠つた、

私は澤山の人を愛した、
最も愛したものに眞實を語る事が出来なかつた、
私は詩を書いたが、本當の詩は書けなかつた、
私は今人生の結論を與へねばならない場合にある、
心の壁に映つた影の場面は一つ一つ消えてゆく。
私は壁の彼方に、もつと廣くもつと深い人生があるやうに感ずる、
私は壁に秘密の門があるやうに感ずる、
私は立つて床の間に上り、これに觸れようとする、
門がない、ただ平たく擴つてゐるのみだ。

跋にかへて

大東亞文化建設の確立

わが日本は國をなして二千六百年、この長い年月の間老ゐた衰へたといふことを知らない……常に潑刺たる感情を盛りあがらせ、博く智識を漁つて人生を新らしく新らしく開拓して來て居ります。私共の天から與へられた力、武と文の二つに亘つて、未だ曾て硬化したといふこと知らず、將來へ將來へ邁進して、青年國の特權を善良に正しく使用して來て居ります。かかる青年國が世界のいづこ

に有りやであります。まことに日本は永劫の青年國であるといつても過言ではありません。神武天皇大和の橿原に都を開き給ふた時の所謂肇國の神勅を拜しまするに、「夫れ大人の制を立つる義必ず時に従ふ、苟も民に利あらば何ぞ聖造に妨はむ」のお言葉があり、また「六合を兼て以て都を開き八紘を掩ひて宇と爲さんこと、亦可からずや」と仰せられて居ります。今上陛下十二月八日御渙發あらせられ給ふた大東亞宣戰布告の御詔勅に、「東亞の安定を確保し以て世界の平和に寄與する」といふことを戰爭終局の目的となし給ふを思ふと、私は皇祖天皇が二千六百年の昔に於て、既に今日あるを豫言し給ふたごさへ拜察されて、まことに畏き極みであります。わが帝

國の皇室が長い年月の間、終始一貫、この平和的目的を御考慮遊ばされたことぐらゐ、世界に比類なく輝いた事實はないと思ふのであります。今回の對米英戦争に期する所、即ち私共の理想はここに於て不動の姿勢を取つて世界に臨み、この理想以外に私共日本人が天から課せられた使命はないと思ふのであります。

しかしてこの使命こそ自然の大法に順應したものの、亞細亞民族の善良にして明い生活の新體制を開き、西洋諸國の不合理なる壓迫から解放されて共存共榮の實をあげんとするものたる以上、俯仰天地に愧ぢざる聖業なりと思ふ次第であります。故に私共は天賦の智識と忍耐とをますます擴大充實してその完成へと邁進しなければな

りません。私共に健康な體力と不屈の大精神があります。これ前途の萬難を排除し、一刀兩斷、積年の禍根を切つて、天が私共に使命を達せしめんとするに外ならないのであります。若し私共が反對にこの健康と精神を不正當に使用して、憐れむべき亞細亞の隣國民族に諸外國の暴戾行爲を繰返したならば、それこそ不愉快極まつたことであり、前に申しました二大詔勅を冒瀆したことになる……

…これ等の亞細亞民族の多くは智乏しく經驗少く、われに頼らざれば獨立し得ない、彼等を外國の魔手から解放することは天業であつて私事でない、彼等に臨むに優越性を以てすることは天の許し給はぬことを私共は知らねばならない、彼等は私共の隣人であり友人で

あつて奴隸でない、大東亞建設に於ける共同責任者として常に尊敬すべきでなければならぬと思ふのであります。もごより私共が先進國たる自信を輕んじそれを彼等に語つて悪い理由はない、然しごこまでも彼等を受撫し奨励し鞭達して、彼等に明朗な力強い樂天的氣分を養はせて將來の建設事業に共同の働きをさせねばならないと信じて居ります。

日日の新聞はヒリッピンにマレーに蘭印諸島にわが國の戦果が擴大して往くことを矢繼早に報道して居ります。ああ、私共の頭腦に希望の雲が涌き上るのを覺える、従つて私共使命の前途が如何に洋たるかを喜ばざるを得ません。この時に當つて、私共は二大詔勅

の示し給ふた大義に答へ奉り、如何に私共が機を見る明にして策に富み、如何に私共の實行力が勇猛果斷であるかを立證するご覺えざるを得ません。まことにこの二大詔勅こそは私共に取つてインスピレーションの泉であり、わが歴史を飾る最も重大なる御言葉であつて、それより私共日本人の活力が生れ、日本精神がより完全に生長擴大し行くことを疑はないのであります。八紘爲宇の御神意こそ、大東亞建設に於けるあらゆる部門に對する柱石であつて、私共は二大詔勅を謹誦して自ら反省すると共に元氣づいて勇往邁進、以て建設の理想を實現し皇恩に報いねばならないのであります。

十二月八日宣戦布告の大詔渙發せらるるや、決死の勇士曉天の布

哇眞珠灣を襲い、一舉に米國の主力艦を屠りました。續いてマレー沖に無敵の牙城なりと天下に嘯いた英主力艦を海底の藻屑となし、香港落ちマニラの没落となつて、雄渾六千海里の大作戦は豫想外の成功を納めたのであります。今マレーの大部分が皇軍の馬蹄に蹂躪される所となり、シンガポールの大要塞の陥落も間近かに迫つて、蘭印諸島の攻略も始まつて居ります。皇軍の向ふ所敵無く、若し山嶽重疊してその進路を阻まんか、皇軍は一氣に蹴散らして彼等の辭書には不可能といふ文字がありません。ああ偉なる哉壯なる哉、彼等は必勝必滅の英雄兒であること云はねばならない。これ神護の然らしめる所なりと私は祖神に感謝すること共に、彼等の霸業を稱へざる

を得ません。然し一方に至難な問題がある、といふのはヒリッピンやボルネオの大きな島嶼、并に佛印泰に地つづきのマレー半島などに於ける戦事經營が果して巧妙に處置せられるだらうかといふことである。若し私共がこれを誤つたならば、世界戦史無比の大勝に申譯がなく、そのため生命を捨てた犠牲者の靈を慰める言葉が見出されないであらう。ここに於て私共はわれ等大使命の成否が決するのは即ちこの問題であると思ふのであります。皇軍の細心な智謀と果斷なる現實力に劣らない程度のもがないと、恐らくこの平和工作の完遂は蓋し困難でないかと考へられる。しかして更にまた文化的建設の布陣と實行が立派にその効果を擧げない時は、私共の大使命

も計畫倒れになつて達成されないことになります。平和工作のなかでも特に文化建設は、短時日で成績を見る事が出来ない。假にマレー島民が搾取の對照となつて英國の植民政策のため睡眠状態に落とされたとしても、今急に日本の息吹で解放と自由を得た所で、さう活發な働きを彼等に期待出来るものでない。彼等が文明人として五十年後れてゐる、百年も後れてゐるならば、彼等に同じ年月を與へなければ本當に彼等の覺醒は見られない。日本のやうに長足の進歩發達をした國があるから、一概に云へないが、要するに素質の問題一つにかかつてゐる。

然し日本が本腰で大東亞建設に乗りだしたばかりの今日、さう慌

てて悲觀するに當らないと思ひます、前途の多難なることは覺悟の上です。世界いづれの國を見ても複雑奇怪ならざるはなく、特に對外關係に於ては自分の思ふやうにならない。日本は今澤山の亞細亞民を糾合して共榮共存の大團結を作らんとするのだから、決して樂しむ仕上る事業でないことは誰でも知つて居ります。ただりんりんと勇氣を高鳴らして、目的さして前進するのみであります。有難いことはわが國は、天壤無窮搖ぎなき國家を戴き、聖天子神意を降して國民の往くべき道を明かにし給ふことであります。十二月八日の御詔勅は、一億國民の奮起特に陸海將兵の決死を呼びかけ給ふた宣戰布告に相違ないが、その最も重大なる意味は八紘爲宇の大義を開

陳せられ東亞永遠の平和を期し給ふた點にあると拜察せられます……この大理想完成のため、百難を排除して道を求めてゆくぐらゐ私共日本人の名譽はないと信ずるのであります。既に大理想の確立するあり、また私共にそれを實行化し得る力あるに於ては、必ずや闇雲破れて太陽輝き、一陽來復の春期して待つべしと思ふのであります。俯仰天地に愧ぢざる使命ある以上、私共の樂天的であるのも當然であるやうに思はれます。

かく觀じ來ると私共の大事業は、神の面前に於ける仕事であつて成功不成功を目標とすべきでなく、短日月の結果によつて批評すべきでないと思はなければならぬ。神は成功をのみ稱讚し給はず失

敗を深く愛しみ給ふといふ言葉があるが、この意味は失敗のなかに成功以上の教訓がある、失敗は更に成功へと進む重要な一階段であるといふことに相違ない。人間は成功だけを撰ぶ権利がない、私共は不成功のなかに人生擴大の榮養を拾つて、眞實の經驗を積まねばならない、成功と云ひ不成功と云ひ、恐らく誰もその分界線を明かにしないであらう。故に私共の大事業、大東亞建設に於て失敗を見る場合、私共は失敗に感謝して更に勇往邁進の道を切り開かねばならぬと信じます。要するに理想の有無が先決問題である……私共の理想は二大詔勅によつて炳乎としてかがやき、天日の如くに純であります。私共はこれを拳拳服膺して以て世界の新歴史を書かねば

ならない。軍事經濟文化分れて三であるが合して一、機に應じ變に處して智識と忍耐を傾注しなければならぬのであります。

註、本篇は一月十九日夜J O A Kより筆者の放送せしもの。

昭和十七年三月十日 印刷
昭和十七年三月十五日 發行



宣 戰 布 告

定價 貳圓八錢
(外埠定價參圓八錢)

著 者	野 口 米 次 郎
發 行 者	東京市麹町區有樂町一ノ二四 岩 壁 保
印 刷 者	東京市日本橋區濱町二ノ三七 三 久 堂
發 行 所	東京市麹町區有樂町一ノ二四 道 統 社
電 話	銀座 五四一 有樂町 一六五六
會 員 番 號	二〇五七〇番

東京市神田區淡路町二ノ九
配給元 日本出版配給株式會社



~~911.56~~

~~N93-~~

~~2~~

911.56

N93

2

終

